

# 白樺文学館

SHIRAKABA LITERARY MUSEUM

こんにちは。いらっしやいませ。

本日は当文学館にお越しいただき、ありがとうございます。

簡単にこの文学館についてご案内させていただきます。

この文学館は2001年1月に、(株)日本オラクルの前社長 佐野 力さんにより、純粹の私立(わたくしりつ)の文学館として開設されました。佐野さんは、以前に15年間ほど、この我孫子に住まれ、お世話になったお礼にと、この文学館を建設されました。

それでは簡単に文学館の概要についてご案内いたします。

地上3階、地下1階の建物は、1階が資料室とコミュニティ・ルーム、2階は展示室と和室、地階は音楽室で、3階部分はオーナーのプライベートフロアとなっております。

入館されたエントランス・ホールとその左手のコミュニティ・ルームには、白樺派の文人達が活躍した大正時代を象徴的に描いた竹久夢二の叙情絵画を展示しております。2点の肉筆画と8点の復刻版画、および1点の書の合計11点がございます。

1階の資料室には、白樺派の名前の由来となりました雑誌『白樺』のオリジナル版があります。『白樺』は1910年(明治43)4月に創刊され、1923年(大正12)8月号まで160冊が発刊されましたが、当文学館はそのうち135冊を所蔵しております。大正12年の9月号は印刷済みでありましたが、9月1日の関東大震災により焼失し、8月号が最終号となりました。隣接して展示しました復刻版は全160冊が揃っております。

資料室正面奥の書架は、雑誌『白樺』を創刊した中心人物達のうち、手賀沼のほとり、我孫子に移り住み、さまざまな創造・芸術活動を展開した志賀直哉、柳宗悦・兼子夫妻、武者小路実篤、バーナード・リーチなどの全集、評論、および「民芸」の仲間の図録などを収蔵しております。

2階の展示室は、上記の文人達の直筆原稿を始め、書、書簡、絵画、陶磁器などを展示しております。さらに、白樺派が彫刻家ロダンの作品を日本に最初に紹介したことに因んで、ロダンの傑作のひとつ「鼻のつぶれた男」を展示しております。

また柳宗悦は、在野の職人達の手になる日常雑器、陶磁器、茶碗、甕(かめ)、壺、和筆筒などの家具、普段着用の着物、染色などに造形や工芸の美しさを見出し、それらの手仕事を全国から探し出して、これを”民衆の工芸”すなわち「民芸」という言葉で表現し、陶芸家の濱田庄司、河井寛次郎らとともに「民芸運動」を始めました。